

久好孝子(国際医療福祉大学)

1. 問題の所在: 日本語と韓国語は、同じ SOV 型に属し、形態・統語的に類似している。そのため、両言語の形式・意味・機能は細部にわたって比較研究されている。しかし、事象をどのように表現・コード化しているか、という大局的な視点の研究は少ない。特に、談話内で、各節の項位置に現れる指示対象がどのような形式・文法関係・意味属性でコード化されているかを量的に分析したものはない。本研究では、日本語と韓国語の談話テキストに細かくアノテーションを加え、それを基に、使用頻度の高い表現方法・コード化を分析する。

2. 理論的背景: 文法はその使用から立ち現われてくるという、機能主義的アプローチ(Haiman:1994, Bybee:2003)を拠り所に、使用頻度を分析する。また、「1節内の語彙項は最大1つ」という「単一語彙項の制約」(Du Bois:1987)を基に、日本語と韓国語の「書き言葉」の談話を分析し、好んで使用される表現の方略、指示対象のコード化を確認する。

・[ϕ_i [資料-の ϕ_j 入った] カバン j -を 足元に 置いた]
 (A, Ani) S, Lex, InA O, Lex, InA

A:他動詞主語、S:自動詞主語、O:他動詞目的語、Lex:語彙名詞、 ϕ :省略、Ani:有生、InA:無生

1) 類似点	・「書き言葉」には「単一語彙項の制約」が機能している ・他動詞構文で好まれる伝達方法は「A/省略/有生+O/語彙名詞/無生」 (日本語(45.6%)、韓国語(49.3%))
2) 相違点	・「S/語彙名詞」 日本語(43.3%)<韓国語(48.9%) ・「O/語彙名詞」 日本語(58.2%)<韓国語(66.7%)

日本語と韓国語の両言語において、項が複数要求される他動詞構文において「A/省略/有生」の傾向が強いことが確認された。両言語の違いは、自動詞構文と他動詞構文の第2項の位置に現れる語彙名詞の頻度である。日本語に比べて韓国語は、項位置を語彙名詞で埋めて表現する傾向が強いことが判明した。語彙名詞をどの項位置で表すかという点において、日本語に比べ韓国語の方が安定していると考えられる。

Bybee, Joan. 2003. Cognitive processes in grammaticalization. *The new psychology of language, volume II*, ed. by Michael Tomasello. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

Du Bois, John W. 1987. The discourse basis of ergativity. *Language* 63 4: 805-855.

Haiman, John. 1994 . Ritualization and the Development of Language. In *Perspectives on grammaticalization*, William Pagliuca ed.,3-28. Amsterdam: J. Benjamins.